

## 第 138 回中小企業景況調査

～中小企業経営者は、今の景気をどのように感じているのか～

### 緩やかな採算悪化が懸念される中小企業景況

2014 年 10-12 月期の中小企業景況調査では、一部に持ち直しの動きが見られるものの、全産業・製造業・非製造業ともに業況 DI が前期の水準に留まった。

消費増税の反動減が薄らぎ、需要の回復にけん引される形で各産業の業況 DI が改善した前期の活気が失われ、足踏みしてしまった背景には、主に為替相場や原材料価格の変動に起因すると考えられる採算の悪化がある。緩やかに広がり続けるこの動きは、足元の取引からいかにして利益を確保していくのか、という課題を中小企業経営者に突き付けたことを示唆する。

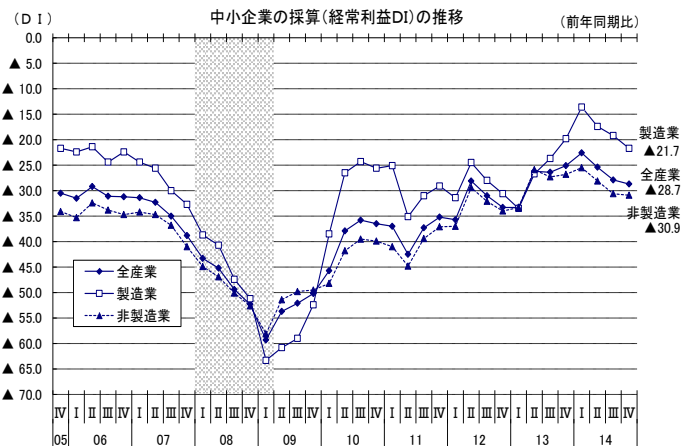
#### 1. 4-6 月期以降、採算の悪化が緩やかに広がっている

今期の全産業の主要 DI（前期比季調値）を見ると、業況判断 DI▲19.4（前期 DI との差（以下、前期差）▲0.7 ポイント減）、売上 DI▲16.4（前期差 0.1 ポイント増）、資金繰り DI▲15.3（前期差▲0.3 ポイント減）と、ほぼ前期の水準から足踏みの状態にあることが示された。

消費増税の反動減が薄らぎ、需要の回復にけん引される形で改善が示された前期

（7-9 月期）の主要 DI の水準を維持した今期

景況であるが、決して楽観視できる状況にはない。特に注視すべきは、採算（前年同期比）DI の動きである。4-6 月期から緩やかな悪化が続いていることは、利益にならない取引環境に苦悩している中小企業経営者の姿を映し出している。



#### 2. “円安” “原材料価格の上昇” の中、利益・採算を確保する

円安や原材料価格の上昇に対する懸念が幅広い業種に広がっている。採算（前年同期比）DI の緩やかな悪化の背景として、今、真っ先に挙げられることが多いこれらの要因に対して正面から向き合い、そして利益確保へ導いた中小企業経営者の姿を今期の調査において寄せられたコメントの中から確認する。

## 【コメント】

- ・ 青果の価格はここ5年で最も低水準にあり潤沢な入荷、消費動向の鈍さより単価安の状態が続くと思われる。このため、利益率の上昇もあるが、売上減少の影響が大きく業況は前年比悪化が見込まれる。(果実卸売業 宮城)
- ・ 夏場以降、学校関係他、民間箱物等が出荷旺盛になり予想以上の出荷数量となっている。また昨年からの値上げ効果もあり、売上、採算面に好成果を得ている。来年度までは契残も含め明るい展望である。(生コンクリート製造業 秋田)
- ・ 内部改善と原価管理に着手し、少しずつ利益に貢献が出てきている。短納期に対応出来る様に体質が良くなってきている。そして、高品質に磨きをかけ喜ばれる商品づくりへ。印刷を核として周辺の事業の安定受注を目指す。(オフセット印刷業 栃木)
- ・ 今期は、固定費の削減により経常利益は若干増加した。来期は、固定費の圧縮と新規の事業展開による業者の確保に努めたい。(自動車一般整備業 埼玉)
- ・ 若干の運賃(一部)の上昇と空車回送を減らす事による輸送効率化、不採算運行からの撤退等により収益率が上昇した。(一般貨物自動車運送業 鳥取)
- ・ 売上の半分以上を占める取引先の1位、2位の元請けが材料の支給制に変わった為、特に鉄筋の価格上昇に悩まされなくなった。その結果、粗利が向上し採算性が向上した。その他の元請は自社負担のままである。(土工・コンクリート工事業 山口)
- ・ お客様の傾向としては、嗜好品を好む傾向であるが、若年層は低価格を好み、店で見た商品をネット購入している。そのため、利益率は向上しているが、売上は伸び悩んでいる。(その他の各種商品小売業 徳島)
- ・ 優良な取引先が1社増えたことにより、加工単価、売上が増加して利益率も向上した。来年の5月までは、利益率の良い注文が続く予定である。(木箱製造業 徳島)
- ・ 原材料価格が上昇してきてはいるが、前年度を上回る受注が来ているため、生産効率が上がっており、なんとか利益を確保できている。ただし製品価格が上げられないので、今後も生産量を落とさない様、拡販したい。(冷凍水産食品製造業 愛媛)

## 3. 見通し：円高を前提とした仕組みから、いかに脱却するか

1985年のプラザ合意以降、日本企業は、円高を前提とした様々な仕組みを構築し、活動を続けてきた。しかし、今般、行き過ぎた円高が是正される方向で日本経済は動き始めた。

今期寄せられたコメントには、新たな経営環境を受け入れ、利益・採算確保に向けた中小企業経営者の取り組みが示されていた。どのような相手と取引をするのか。誰をターゲットにした、どの製品・商品の値上げを図るのか。どのようなコストを調整するのか。前提条件が変わった今、極端な革新を狙うのではなく、必要な方法を慎重に選択し、それを実行することが求められているのだろう。

(文責：ナレッジアソシエイト 平田博紀)